

2024年7月

第30回（令和六年度）定点調査

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

【特別企画】30年の水意識を振り返る

水道水の不満は「質」から「料金」へ 一番おいしいと思う水で「水道水」が増加

＝調査期間：2024年5月28日(火)～6月3日(月)／対象エリア：東京圏・大阪圏・中京圏＝

ミツカン水の文化センター（株式会社Mizkan 広報部内）では、今年6月に、東京圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、大阪圏（大阪・兵庫・京都）、中京圏（愛知・三重・岐阜）の在住者1,500名を対象とした「水にかかわる生活意識調査」を実施し、集計結果をまとめました。

本調査は、1995年の第1回以降、日常生活と水のかかわりや意識を明らかにすることを目的とした定点調査として、継続性を重視する中に、その時々の特ピックを取り入れながら調査を実施し、今年で30回目を迎えました。

そこで今回は、本調査の30年を振り返る特別企画として、第1回および節目の年の調査との比較を行いました。この他にも、30年前との比較設問とは別に、災害時の水の備えに関する経年比較や、2022年より追加した、水への関心や感謝といった生活者の水への関心度を明らかにするための設問、みずみずしいと感じる有名人に関する調査などを実施しました。また、今年も、当センターのアドバイザーである、東京大学 大学院工学系研究科 教授の沖大幹先生に、調査結果の解説をいただきました。

なお、今年の調査データおよび過去（第1回～29回）の集計概要など詳細な情報は、ミツカン水の文化センターのホームページ（<https://www.mizu.gr.jp/>）で公開しています。

《30年の変遷が感じられた結果3選》

【1】水道水の10点評価は30年で上昇

…「水道水を10点満点で評価すると何点か？」に対し、
平均点は、1995年（第1回）5.7点→2024年は7.3点と1.6点上昇。
近年は高水準で推移している。

【2】水道水の不満は、「質」から「料金」へ

…「水道水について不満を感じていることは？」に対し、
不満のトップが「おいしくない」から「水道料金が高い」に変化。でも本当の1位は？

【3】一番おいしい水は「水道水」と思っている人が増加

…「あなたが一番おいしいと思う水は？」に対し、
「水道水」と答えた人が1995年の3.2%、2004年（20年前）の2.0%から、
今年は14.1%と大幅に増加。

◆沖大幹先生による解説 ～Oki's View～

- 💧 水道水の評価：エリア別評価の気になる点とは？
- 💧 水道水の不満点：不満減少の理由を紐解く
- 💧 日常生活で実践していること：節水行動の減少は、水道料金と関係している？

【この件に関するお問い合わせ先】

ミツカン水の文化センター ホームページ内、お問い合わせフォーム（下記URL）よりお願いいたします。

<https://www.mizu.gr.jp/customer/group/mizu.html>

※ミツカングループでは、テレワーク勤務を推進しております。

誠に恐縮ですが、ホームページからのお問い合わせへのご理解とご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

《結果の抜粋と掲載ページ》

■ 調査概要	2ページ
■ 【特別企画】30年の水意識を振り返る	
◇ 水道水10点評価の平均点は30年で上昇。近年は高水準で推移…トピック【1】	3ページ
◇ 居住地別の平均点の差異が縮小傾向	3ページ
◇ 水道水の不満は「質」から「料金」へ…トピック【2】	4ページ
◇ そもそも“不満がない”という人が大幅に増加	4ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ① 水道水の評価	5ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ② 水道水の不満点	5ページ
◇ 一番おいしいと思う水「湧き水」激減、市販の水や水道水が増加…トピック【3】	6ページ
◇ 節水の取り組み方法は変わっていないが、取り組み率は低下	6ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ③ 日常生活で実践していること	7ページ
◇ 水辺でしたいことは、癒しを求める傾向がより顕著に？	8ページ
◇ 家の近くの水辺の変化は、「汚くなっている」と思う人が大幅に減少	8ページ
■ 【緊急レポート】水の備えに関する意識変化	
◇ 災害時の水の備えは、何もしていない人が4割に迫る勢い	9ページ
◇ 2019年をピークに水の備えが減少傾向	9ページ
■ 水への関心	
◇ “関心あり層”は、60.4%	
若者における関心度の二極化は昨年同様	10ページ
◇ 水を“大切だと思っている人”は、87.6%	10ページ
◇ 水に“ありがたさを感じている人”は、83.3%	11ページ
■ 節水の意識と行動	
◇ 節水の意識と行動、ともにやや低下 20代・30代の節水実施率の落ち込みが目立つ	12ページ
◇ 水に関心がない人の過半数が節水を実施	12ページ
◇ 水に関心がない人の節水理由は、家計のため？	12ページ
■ 水道水に関する意識	
◇ 水道水の評価、全体の平均点7.34点 エリア別トップは大阪圏7.52点	13ページ
◇ 大阪圏では4人に1人が10点満点の評価	13ページ
■ 水と生活・文化	
◇ 知っている祝日・記念日は「水の日」認知率が7.6%で過去最高を更新	14ページ
◇ みずみずしいと感じる有名人1位「綾瀬はるか」、「大谷翔平」が男性トップの3位	14ページ

【調査概要】

第30回（令和六年度）「水にかかわる生活意識調査」

- ◆ 調査対象数 : 1,500人
- ◆ 調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20代～60代の男女
- ◆ 調査方法 : インターネット調査
- ◆ 調査期間 : 2024年5月28日(火)～6月3日(月)
- ◆ 回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合 計		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	小計
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合 計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

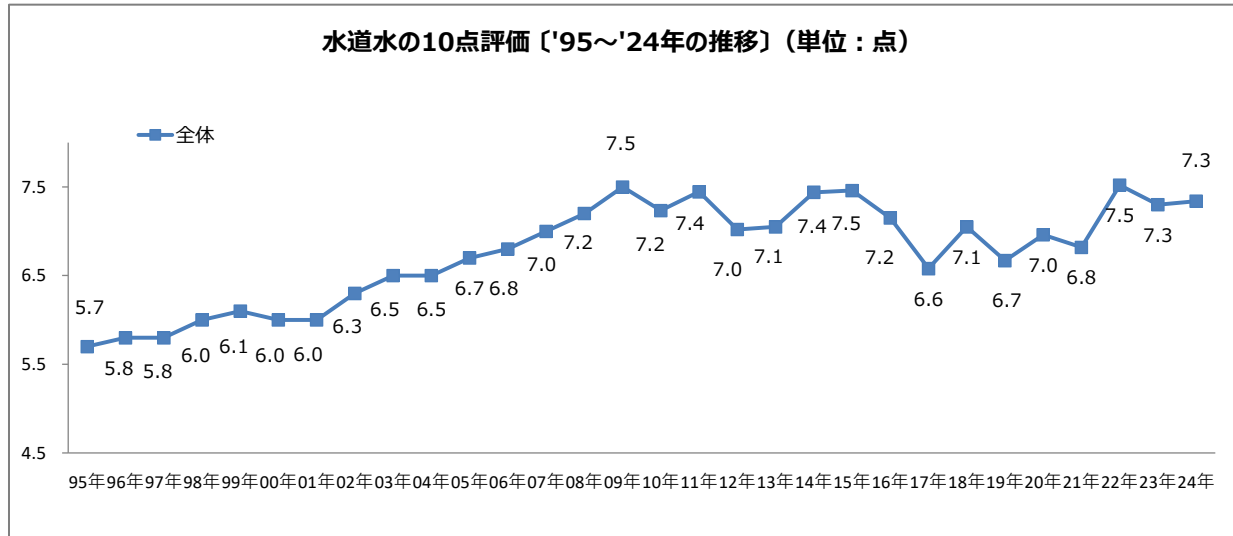
【特別企画】30年の水意識を振り返る

ミツカン水の文化センターでは、「水にかかわる生活意識調査」が今年で30回目を迎えたのを契機に、本調査の30年を振り返る特別企画を実施。生活者における水への意識が30年でどのように変化したのかをみる趣旨で、「水道水の評価」や「一番おいしいと思う水」をはじめとした主要な設問をピックアップし、第1回の1995年、今から20年前の2004年、10年前の2014年と、現在との比較を行いました。

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

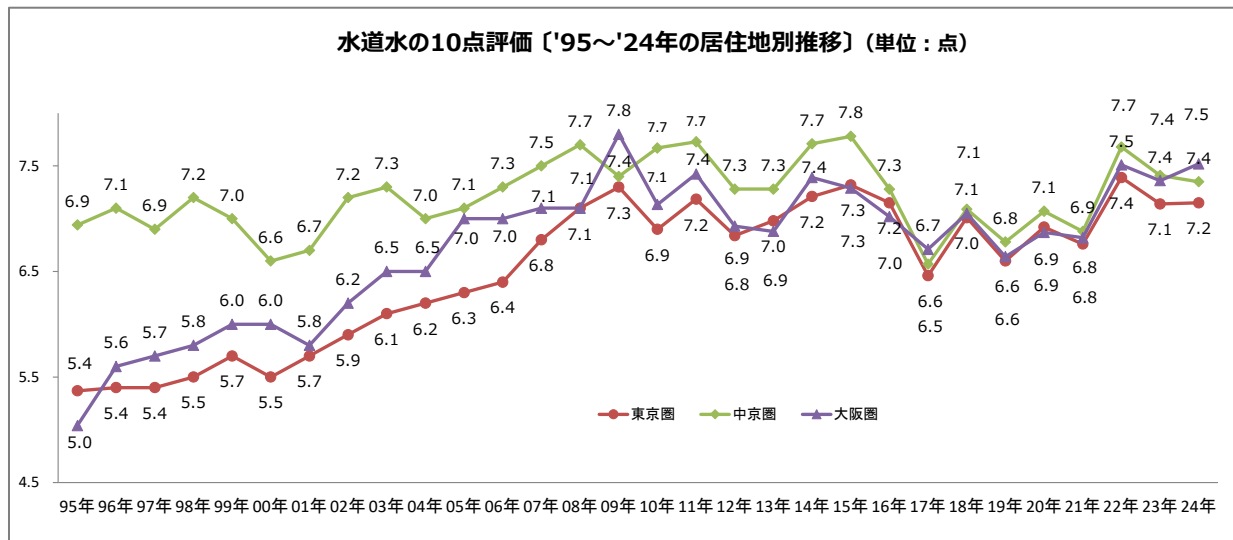
◇平均点は30年で上昇。近年は高い水準で推移

全体の平均点は、第1回調査の1995年が5.7点、30回目となる今年が7.3点と、30年で1.6点上昇しました。経年変化をみると、2009年までは概ね右肩上がりとなっており、同年をピークに、2010年からは横ばいを基調としながら増減を繰り返し、近年はピーク時に近い高水準で推移しています。



◇居住地別の差異が縮小傾向

居住地別の平均点は、1995年が東京圏・5.4点、中京圏・6.9点、大阪圏・5.0点で、2024年が東京圏・7.2点、中京圏7.4点、大阪圏・7.5点といずれも上昇。得点の推移を10年単位で見ると、1995年から2004年までの10年間はエリア差が大きく、次の10年（2005年～2014年）でその差が徐々に縮小。そして、直近の10年、とりわけ2016年以降はエリア差がほとんどなくなり、グラフの曲線がシンクロしているように見えます。居住地別における近年の傾向が、情報環境の平準化によるものなのか、地域性の喪失によるものなのか、調査結果のみで判断することはできないものの、当センターとしては今後の動向に注目してまいります。



Q.水道水について不満を感じていることは？（8択+その他+特に不満はない）

◇不満の内容は、「質」から「料金」へ

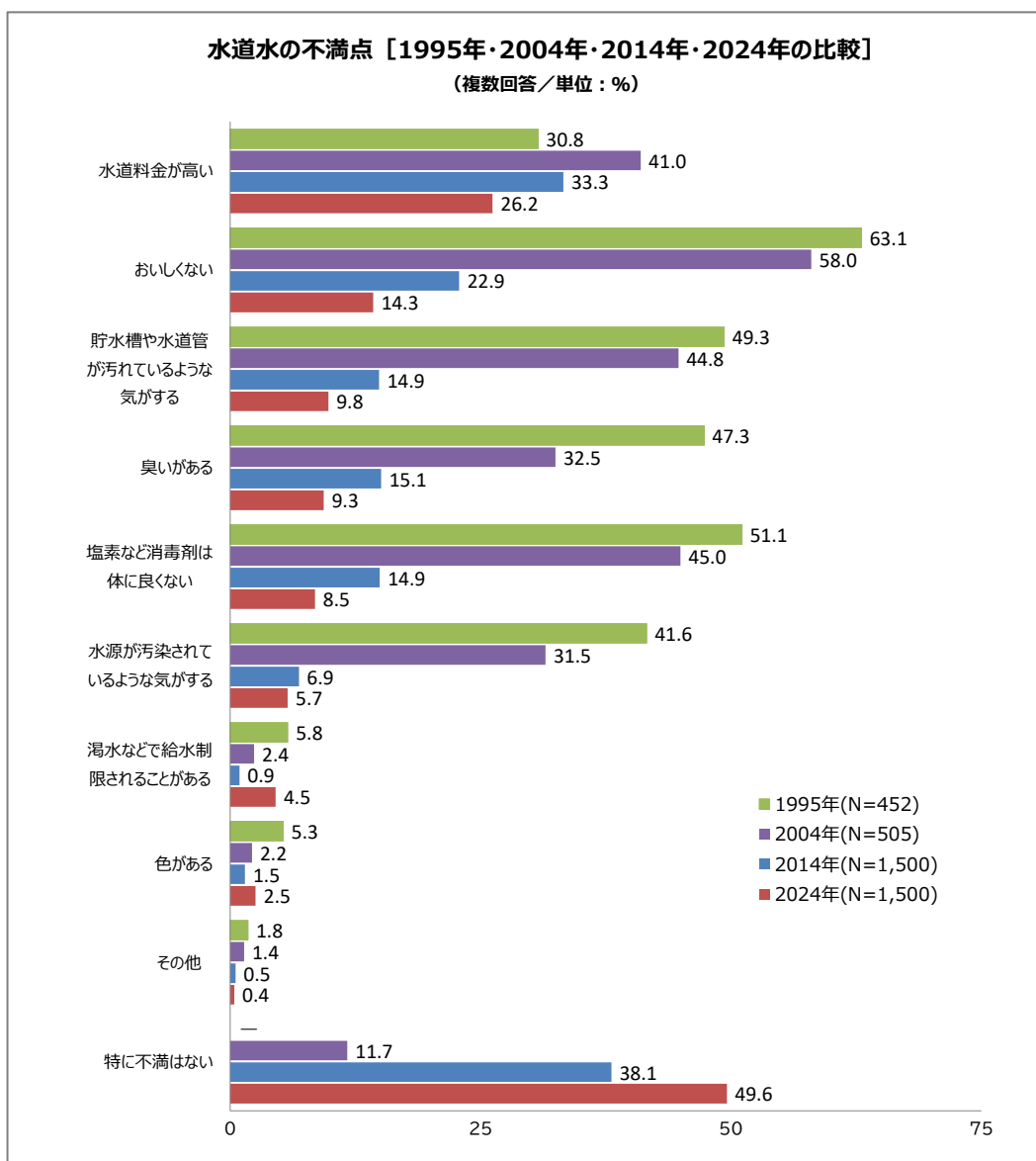
水道水に対する不満について、1995年（第1回）、2004年（20年前）、2014年（10年前）、2024年（現在）で比較すると、1995年と2004年は「おいしくない」「塩素など消毒剤は体に良くない」「貯水槽や水道管が汚れているような気がする」といった味や質に関する項目が上位を占めていましたが、2014年にはこれらの不満が激減し、2024年はさらに減少。それらに代わってトップに立ったのが「水道料金が高い」です。「水道料金が低い」は、1995年以降、常に不満の上位ではありましたが、味や質に関する項目の数値が大きく減少したことにより、近年は不満トップの地位を固めています。

ちなみに、2023年に実施したライフライン（水道・電気・ガス・通信）の料金に関する調査では、最も料金が妥当で、値上げに対する許容度が高いのは「水道」でした（第29回調査レポート参照 <https://www.mizu.gr.jp/img/chousa/2023/kekka2023-13.pdf>）。「水道に対する不満をあげるとすれば料金だが、他との相対的な評価による料金の不満度は低い」ということのようにです。

◇そもそも“不満がない”という人が大幅に増加

本設問における選択肢の一つである「特に不満はない」（1995年は項目なし）に着目してみると、2004年は僅か1割程度（11.7%）でしたが、2014年には約4割（38.1%）に増加し、今年は49.6%と半数に迫る勢いで数値を伸ばしています。

水道料金への不満は常に一定の水準であることを踏まえると、「特に不満はない」の増加には、「おいしくない」や「臭いがある」など味や質への不満の解消が関与しているものと考えられます。



【水道水の評価】

平成が始まってバブルが弾け銀行が破綻したり、1ドル＝80円という円高になったりした1995年は1月の阪神淡路大震災や3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件があった一方で、ロサンゼルス・ドジャースに所属した野茂英雄投手が日本人として初めてナショナルリーグの新人王に選ばれた年である。

今年で30回を迎える「水にかかわる生活意識調査」の第1回はそんな年に行われた。

日本全国の下水道普及率がまだ54%(2022年には92.9%)だった当時、全国の河川の環境基準達成率もまだ72%(2021年で93%)で水道の原水となる河川水はまだまだ汚れていた上に、都会に集まる人々に安全な水を安定して供給するのが精いっぱい、味にまで気を配る余裕はなかった。そのため、特に東京や大阪といった大都会では水道水と言えはまずい、という認識が普通であった。

しかし、東京では1992年からオゾン処理に生物活性炭処理を組み合わせた高度浄水処理を開始して2013年に全量への導入が完了し、大阪でも1993年に同様のシステムを導入し始め2000年には市内全域に高度浄水処理水を配水するようになった。

30年にわたる調査の前半はちょうどこの時期に相当し、10点満点で5点ほどだった東京や大阪の水道水への評価は2009年にかけて上昇し、7点を超えるようになってその後は多少の増減を繰り返しながら評価は横ばいとなっている。

中京圏が1995年当初から高い評価を得ているのは主な水源である木曽川の水質が良いのに加えて今でも一部では緩速ろ過も用いられているからだというが、いずれにせよ素晴らしい。ただ、少し気になるのは特に2016年以降、評価の年々の変動のし方が東京圏や大阪圏と同期している点である。郵送アンケートからウェブアンケートに変えたのは2010年だそうなので、それが原因とも考えにくい。謎である。

【水道水の不満点】

水道への不満があるとしたら近年は「水道料金が低い」が筆頭だが、以前はそうでもなかった。

その昔、ペットボトルを含む瓶詰水の消費量が年間1人あたり4.5リットルであった1995年(2023年には40.2リットル)、最大の不満は味、63.1%の回答者が「おいしくない」を不満としていた。評価が上がった今では味に不満を持つ人は14.3%にすぎず、同様に、臭いへの不満は47.3%から9.3%に、色は5.3%から2.5%に減少している。ちなみに、水道水が一番おいしいと答えた人はこの30年間で3.2%から14.1%に大幅増だが、市販のペットボトル入りの水も18.3%から29.5%へとポイント的にはもっと増えている(6ページ参照)。ウォーターサーバーやタンクの水など、30年前には一般的ではなかった水を一番おいしいと考える人が増えた分、井戸水や湧き水が一番おいしいと考える人が減って、私たちの(記憶の中の)飲み水の水源が大きく変化したことがうかがえる。

水源汚染への不安も41.6%から5.7%へと減少しているが、これには、味の向上に加えて、普段眺めたり触れ合ったりする水環境が改善したおかげもあるだろう。貯水槽や水道管の汚れへの不安も49.3%だったのが9.8%へと減少しているが、これは2001年の水道法改正時に10m³以下の小規模の貯水槽についても各自治体の条例で大型の貯水槽と同様の管理が求められるようになり、それまでに比べると定期的な清掃と点検、水質検査などが行われるようになったためだろう。

塩素など消毒への不満も51.1%だったのが8.5%に激減している。これには消毒の重要性に対する理解の広がりもあるかもしれないが、むしろ、以前は安全を優先し、残留塩素濃度0.1mg/L以上1.0mg/L以下という国の水道水質基準の上限である1.0mg/Lに近い濃度で配水していたところ、塩素消毒の副生産物で発がん性が指摘されるトリハロメタンの生成を減らすためあって塩素投入量を減らす努力がなされたおかげだろう。管路の適正化により配水中に反応して塩素が減少するのを抑えたり、浄水場で1.0mg/L近くの濃度に上げて送るのではなく、途中の給水所で必要量を追加で注入するシステムを導入したりして0.4mg/Lを蛇口での目標の最大値と設定する自治体が増えたのである。30年前に比べて確実に塩素臭が減った成果が不満の激減に反映されている。

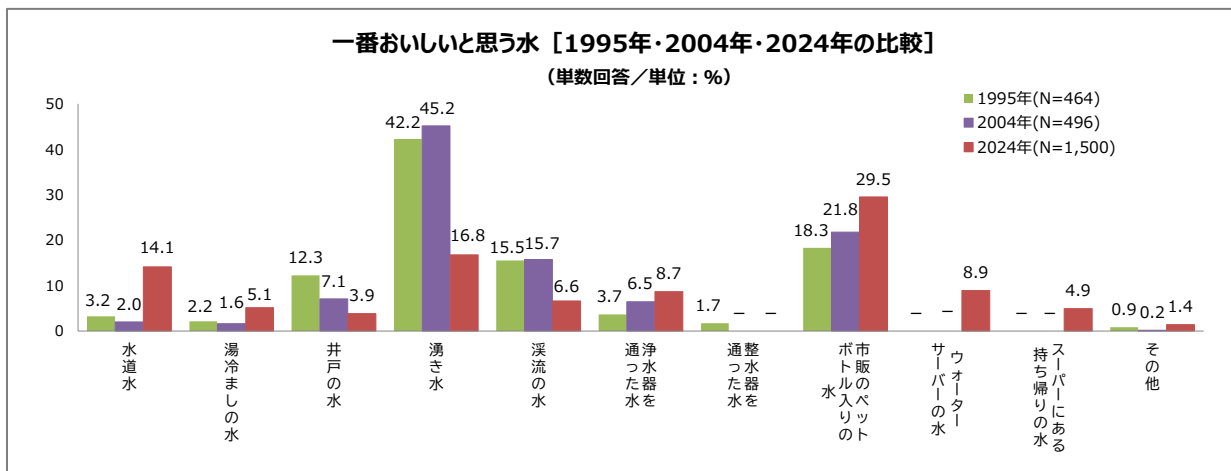
このように様々な不満点が激減した中で、料金に対する不満は30.8%から26.2%へと多少は減ったものの、他に比べると際立って高くなっている。もっとも、昨年度調査では電気、ガス、通信に比べて料金への納得感は高く、料金値上げに対する許容度も高かった。今後、減り始めた人口で同じサービスレベルを維持するには多少のコスト高を受け入れざるを得ないと想定される。これからの30年でどのように回答が推移するか目が離せない。

Q.一番おいしいと思う水は？ [9択（'04年:7択、'95年:8択）+その他]

◇「湧き水」が激減し、“市販の水”や「水道水」が増加

より現実的な安全性を重視する傾向か？

一番おいしいと思う水について、1995年、2004年、2024年のそれぞれのトップ3を比較したところ、1995年と2004年は1位「湧き水」（'95年・42.2%、'04年・45.2%）、2位「市販のペットボトル入りの水」（'95年・18.3%、'04年・21.8%）、3位「溪流の水」（'95年・15.5%、'04年・15.7%）と同様の順位で、2024年は1位「市販のペットボトル入りの水」（29.5%）、2位「湧き水」（16.8%）、3位「水道水」（14.1%）でした。2004年までは不動のトップだった「湧き水」や、「溪流の水」といった“自然の水”の数値が20年の時を経て激減。今年は「市販のペットボトル入りの水」がトップとなり、「ウォーターサーバーの水」（8.9%）と合わせると、約4割（38.4%）の人が“市販の水”を支持しました。また、2004年は僅か2.0%だった「水道水」が、今年は14.1%と大幅に増加していることも注目すべきポイントといえます。これらの結果を踏まえると、近年は、純粋なおいしさやイメージよりも、現実的な安全性を求める傾向にあるのかもしれません。



Q.日常生活で実践している節水や水の再利用方法は？

[14択（'14年:12択、'04年:11択）+その他+実践していることはない/'95年:5択]

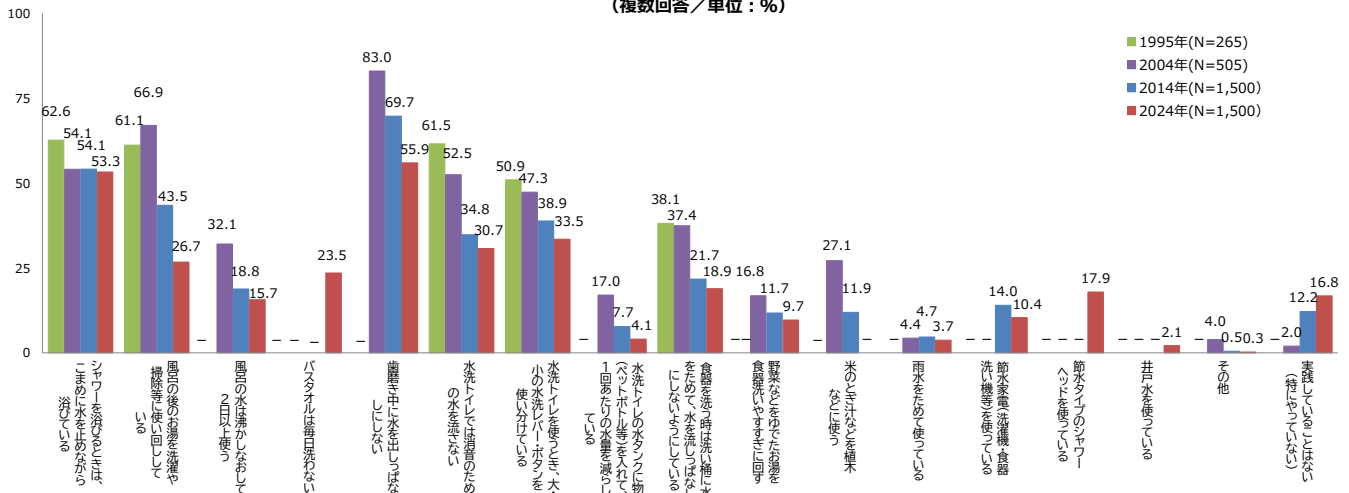
◇節水の取り組み方法は変わっていないが、取り組み率は低下

生活者における節水や水の再利用の取り組みは、30年でどのように変化したのでしょうか。日常生活で実践している方法について、1995年、2004年、2014年、2024年の比較を行ったところ、1995年の1位は「シャワーを浴びるときは、こまめに水を止めながら浴びている」（62.6%）、以降は、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（'04年・83.0%、'14年・69.7%、'24年・55.9% ※2001年に項目追加）が毎回トップとなっています。

本設問は、日常的に取り組まれている節水方法の移り変わりを把握する趣旨で、時代に合わせて選択肢を追加（または削除）しながら調査を続けているものの、上位を占める項目（「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」「シャワーを浴びるときは、こまめに水を止めながら浴びる」「水洗トイレを使うとき、大小の水洗レバー・ボタンを使い分ける」「水洗トイレでは消音のための水を流さない」「お風呂の後のお湯を洗濯や掃除等に使い回している」など）は毎回同様の顔ぶれとなっており、取り組み方法の経年変化はほとんど見られませんでした。しかし、各項目の数値に目を向けると、例えば「お風呂の後のお湯を洗濯や掃除等に使い回している」や「水洗トイレでは消音のための水を流さない」は1995年から30ポイント以上減少、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」は2004年から27.1ポイント減少と、大きな変化が見られました。「水洗トイレでは消音のための水を流さない」の減少は、トイレの音消し用擬音装置の普及が影響した可能性も考えられますが、全体的に取り組む率が低下していることは言えそうです。

日常生活で実践している節水や水の再利用方法〔1995年・2004年・2014年・2024年の比較〕

(複数回答／単位：％)



沖大幹先生による解説 ～Oki's View～ ③

【日常生活で実践していること】

節水や再利用にかかわる日常の行動は軒並み減少している。回答からうかがえるのは、半数近くの人がシャワーを浴びる際にこまめに水(お湯?)を止めたりしていないし、歯磨き中は水を出しっぱなしにしている。2/3の人は水洗トイレを流すときに大小のレバーやボタンを使い分けていないし、3/4の人たちは風呂の後のお湯を洗濯や掃除などに使いまわしたりしていない。お風呂のお湯を洗濯に使うのは不潔だという考えもあるだろうが、洗濯物を入れた洗濯槽の水は風呂の水よりも普通は高濃度に汚いのではないだろうか。2004年でも沸かしながわして風呂の水を2日以上使う方が32.1%いたところ、今年は半減の15.7%である。

もし水道水が高くて節約しようと思ったらもう少し水道水を大事に使うと思うのだが、実はそこまでするほどには水道料金は高くないと感じている人が多いという事実の反映なのだろうか。

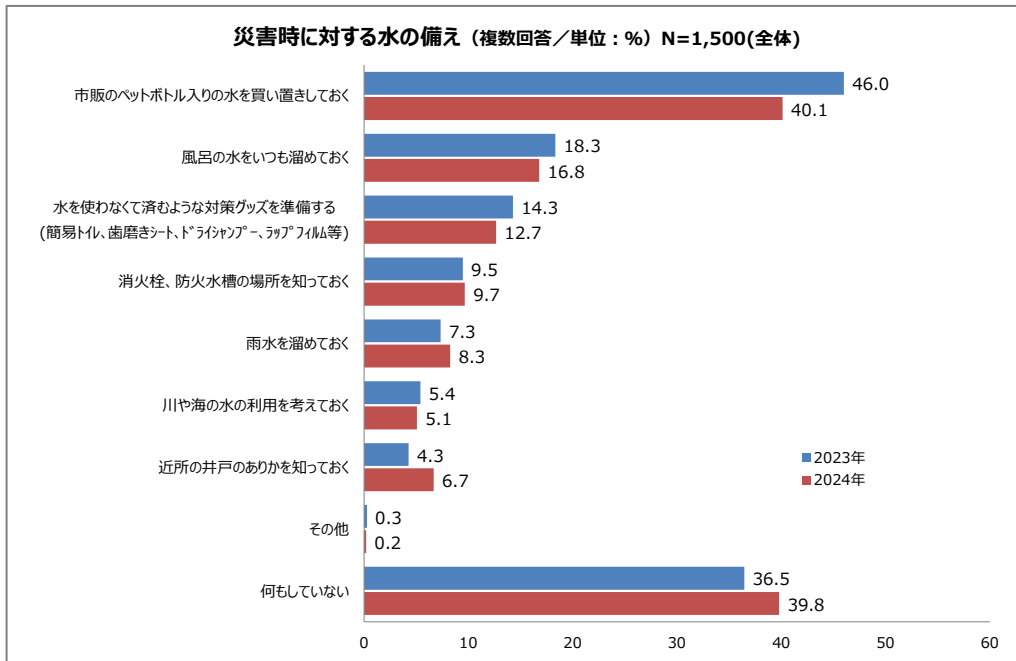
【緊急レポート】水の備えに関する意識変化

地震や豪雨などの大規模な災害が頻発している昨今、災害時の水の備えに対する生活者の意識はどのように変化しているのでしょうか。今回、昨年に続き災害時の水の備えに関する設問を調査し、2010年以降の経年比較を行いました。

Q.災害時に対する水の備えは？（7択＋その他＋何もしていない）

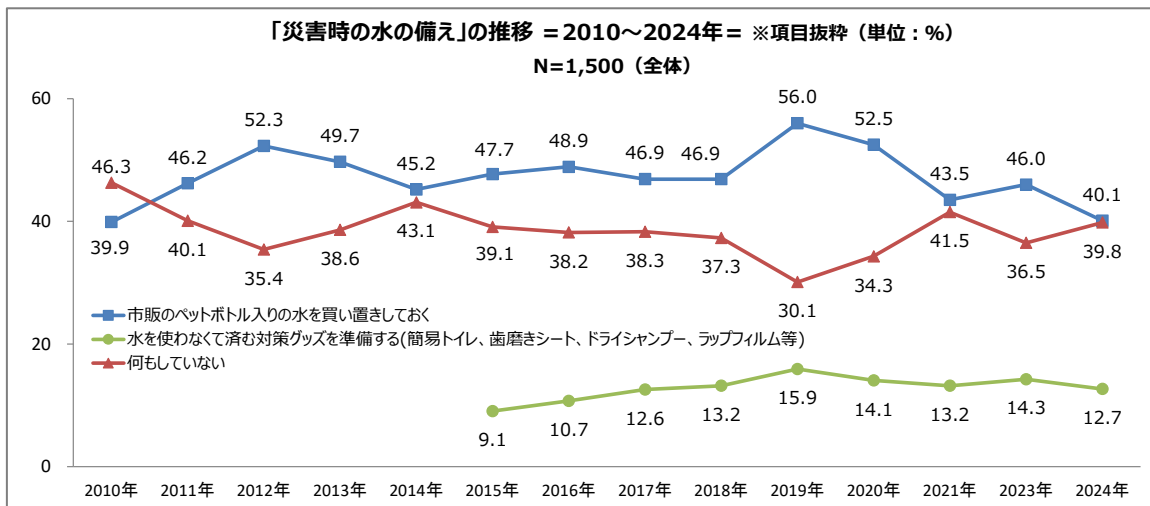
◇何もしていない人が4割に迫る勢い

今年の結果は、「市販のペットボトル入りの水を買って置きしておく」（40.1%）がトップであるものの、数値は昨年から5.9ポイント減少しました。2位は「何もしていない」（39.8%）で、こちらは昨年比3.3ポイント増で4割に迫る勢いとなっています。以下、3位「風呂の水をいつも溜めておく」（16.8%）、4位「水を使わなくて済むような対策グッズを準備する（簡易トイレ、歯磨きシート、ドライシャンプー、ラップフィルム等）」（12.7%）、5位「消火栓、防火水槽の場所を知っておく」（9.7%）となり、トップ5の順位自体は昨年と同様でした。



◇2019年をピークに減少傾向

2010年以降の主要項目の割合を経年でみたところ、2010年は4割にも満たなかった「市販のペットボトル入りの水を買って置きしておく」は、翌年以降に数値を上げ、概ね5割前後で推移していますが、2019年をピークに近年は減少傾向にあります。2010年のトップだった「何もしていない」は、その後概ね4割前後で推移し、2019年には30.1%まで減少するも、以降は増加傾向と言えます。2015年に項目を追加した「水を使わなくて済むような対策グッズを準備する（簡易トイレ、歯磨きシート、ドライシャンプー、ラップフィルム等）」は、概ね1割強で推移し、2024年は12.7%となっています。今年1月に発生した令和6年能登半島地震では、トイレ対策の重要性が浮き彫りになりましたが、災害時に下水道へ水を流せなくなることへの意識の高まりは、まだ見られませんでした。



水への関心

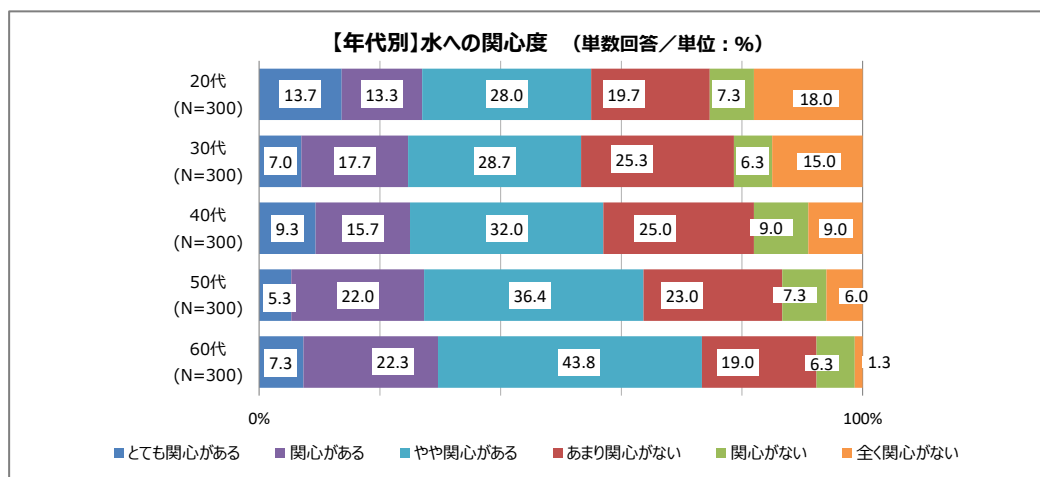
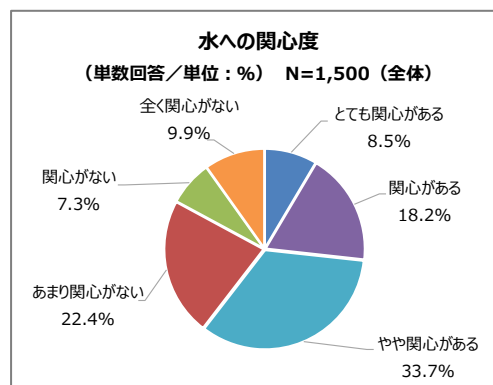
Q.水への関心度は？（6択）

◇“関心あり層”は、60.4%

若者における関心度の二極化は昨年同様

水についてどの程度関心があるか聞いたところ、「とても関心がある」8.5%、「関心がある」18.2%、「やや関心がある」33.7%、「あまり関心がない」22.4%、「関心がない」7.3%、「全く関心がない」9.9%となり、「とても関心がある」「関心がある」「やや関心がある」を合計した“関心あり層”は60.4%でした。

年代別にみると、「とても関心がある」は20代・13.7%、30代・7.0%、40代・9.3%、50代・5.3%、60代・7.3%、「全く関心がない」は20代・18.0%、30代・15.0%、40代・9.0%、50代・6.0%、60代・1.3%で、いずれも20代が最も高く、“若者における関心度の二極化”という昨年と同様の傾向が見られました。

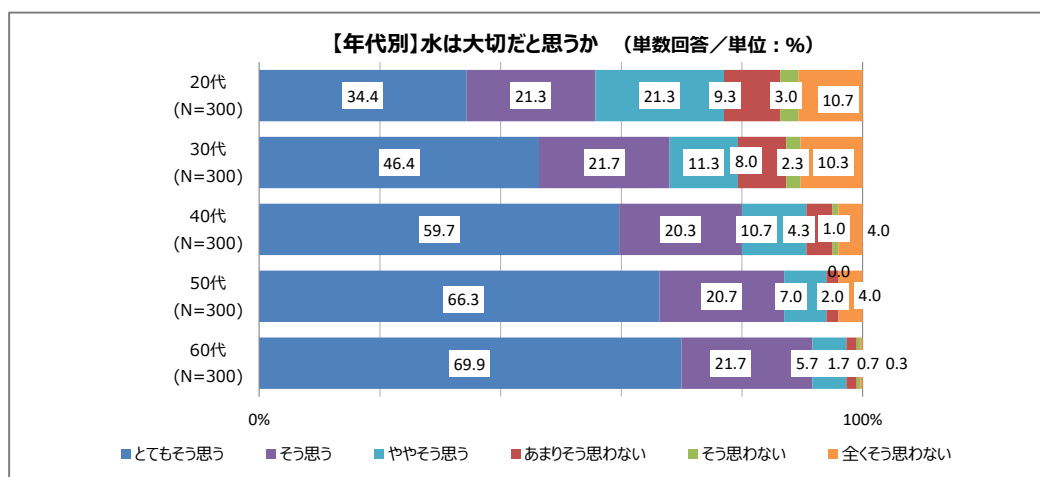
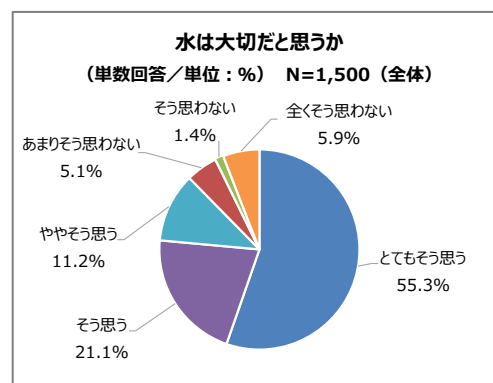


Q.水は大切だと思うか？（6択）

◇“大切だと思っている人”は、87.6%

水は大切だと思うかをたずねたところ、「とてもそう思う」55.3%、「そう思う」21.1%、「ややそう思う」11.2%、「あまりそう思わない」5.1%、「そう思わない」1.4%、「全くそう思わない」5.9%となり、「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」を合計した“大切だと思っている人”は全体の87.6%でした。

年代別にみると、「とてもそう思う」は20代・34.4%、30代・46.4%、40代・59.7%、50代・66.3%、60代・69.9%と年代が上がるほど多く、「全くそう思わない」は20代・10.7%、30代・10.3%、40代・4.0%、50代・4.0%、60代・0.3%と年代が下がるほど多い傾向が見られました。

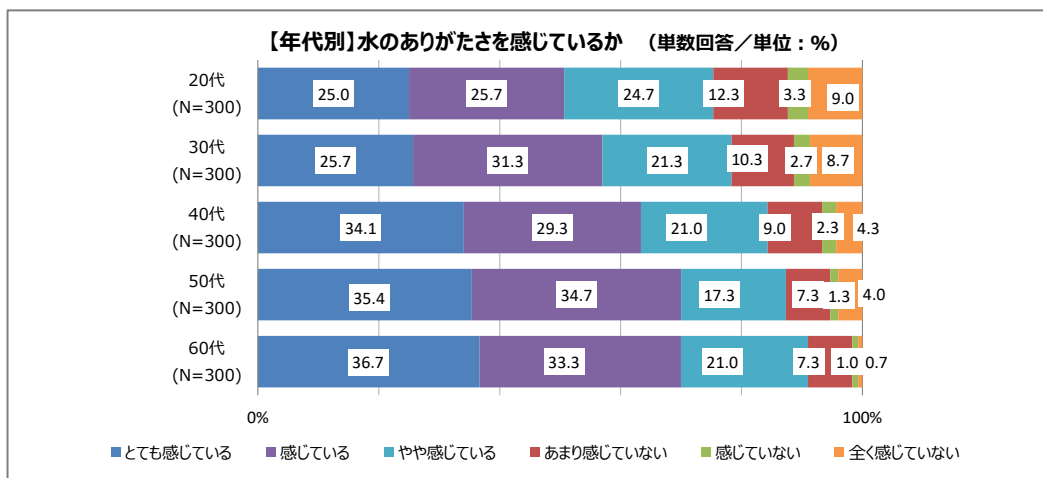
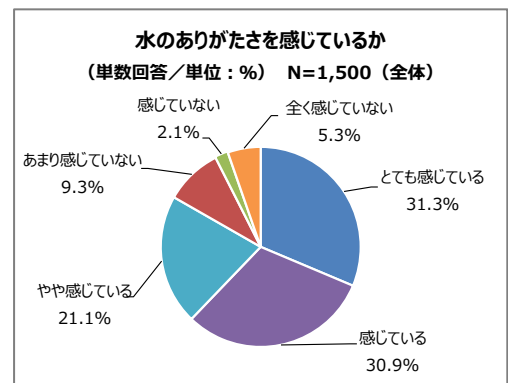


Q.水のありがたさを感じているか？（6択）

◇“ありがたさを感じている人”は、83.3%

水のありがたさを日々の生活で感じているかについては、「とても感じている」31.3%、「感じている」30.9%、「やや感じている」21.1%、「あまり感じていない」9.3%、「感じていない」2.1%、「全く感じていない」5.3%となり、「とても感じている」「感じている」「やや感じている」を合計した“ありがたさを感じている人”は83.3%でした。

年代別にみると、「とても感じている」は20代・25.0%、30代・25.7%、40代・34.1%、50代・35.4%、60代・36.7%と年代が上がるほど多く、「全く感じていない」は20代・9.0%、30代・8.7%、40代・4.3%、50代・4.0%、60代・0.7%と年代が下がるほど多いという、前項「水の大切さ」と同様の傾向が見られましたが、年代間の数値の差異は、“とても大切だと思っている人”の年代差ほど大きくはありませんでした。



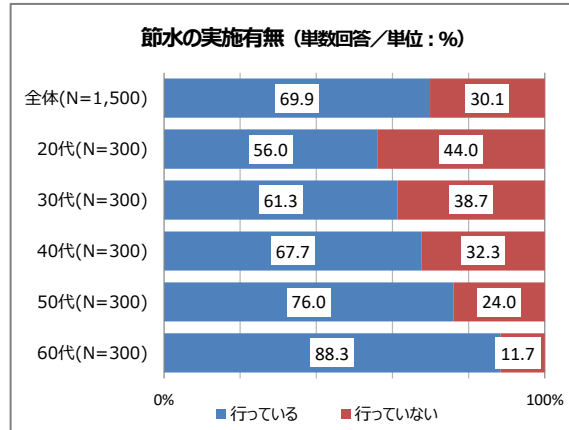
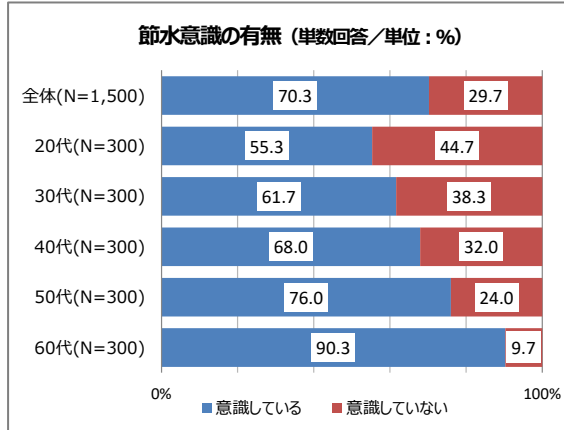
節水の意識と行動

Q.日常生活で節水を意識しているか？（2択）

Q.日常生活で節水を実施しているか？（2択）

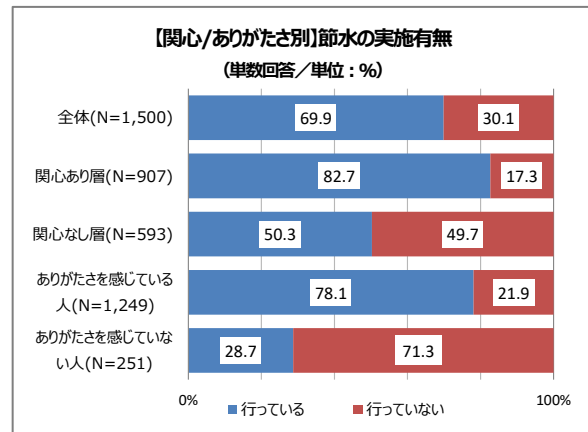
◇意識と行動、ともにやや低下 20代・30代の節水実施率の落ち込みが目立つ

節水への意識と行動は、節水を「意識している」が70.3%、節水を「行っている」が69.9%となり、ともに昨年からやや減少しました。年代別では、節水を「行っている」が20代で56.0%（昨年比10.6ポイント減）、30代で61.3%（同11.0ポイント減）と大きく減少。低年代層における節水実施率の落ち込みが目立ちました。



◇水に関心がない人の過半数が節水を実施

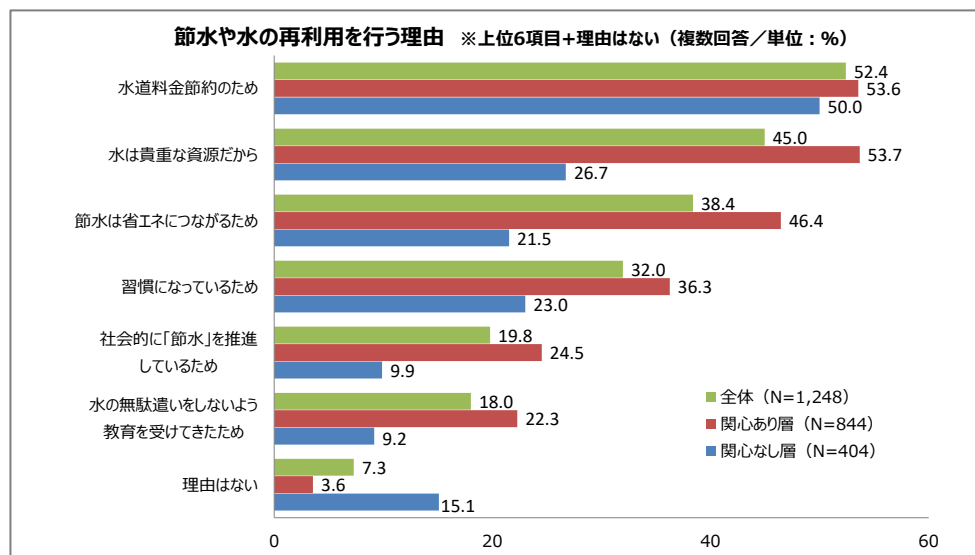
水への関心別および、水のありがたさ別における節水を「行っている」人の割合をみると、「関心あり層」82.7%、「関心なし層」50.3%、「ありがたさを感じている人」78.1%、「ありがたさを感じていない人」28.7%となり、水に関心がない人たちの過半数が節水実施者であることが分かりました。



Q.節水や水の再利用を行う理由は？（13択+その他+理由はない）

◇水に関心がない人の節水理由は、家計のため？

水への関心別に、節水や水の再利用を行う理由をみると、「関心あり層」は1位「水は貴重な資源だから」（53.7%）、2位「水道料金節約のため」（53.6%）、3位「節水は省エネにつながるため」（46.4%）と総じて数値が高いのに対し、「関心なし層」は1位「水道料金節約のため」（50.0%）が抜けて高く、2位「水は貴重な資源だから」（26.7%）以下を大きく引き離しました。

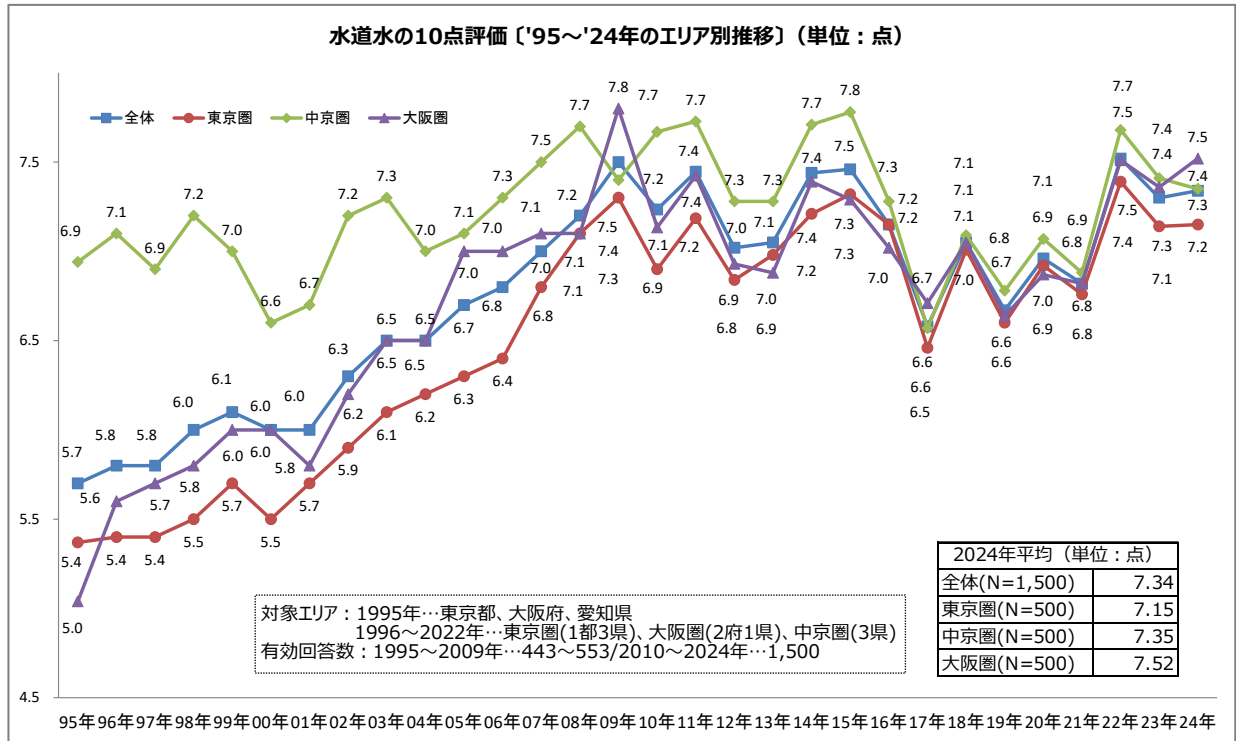


水道水に関する意識

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

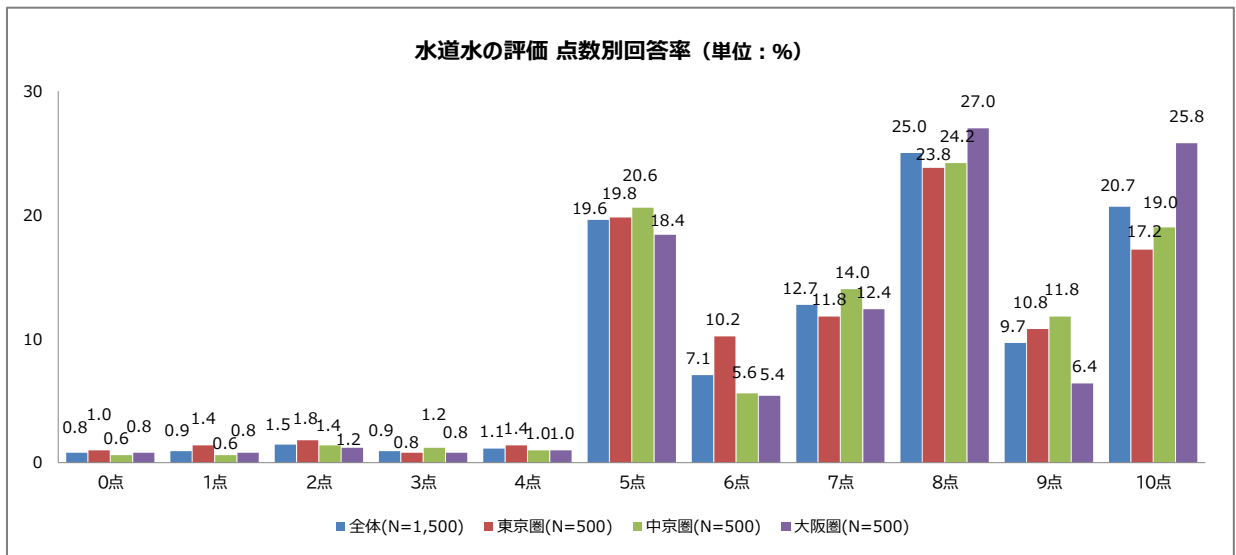
◇全体の平均点は7.34点 エリア別トップは大阪圏の7.52点

水道水の10点満点評価は、全体の平均が昨年比0.04ポイント増の7.34点でした。居住地別では、東京圏が0.01ポイント増の7.15点、中京圏が0.06ポイント減の7.35点、大阪圏が0.16ポイント増の7.52点となり、大阪圏が2017年以来のトップに立ちました。



◇大阪圏では4人に1人が10点満点の評価

点数別回答率をみると、大阪圏は10点満点の回答者が昨年比9.0ポイント増の25.8%となっており、他のエリア（東京圏・17.2%、中京圏・19.0%）を大きく上回りました。

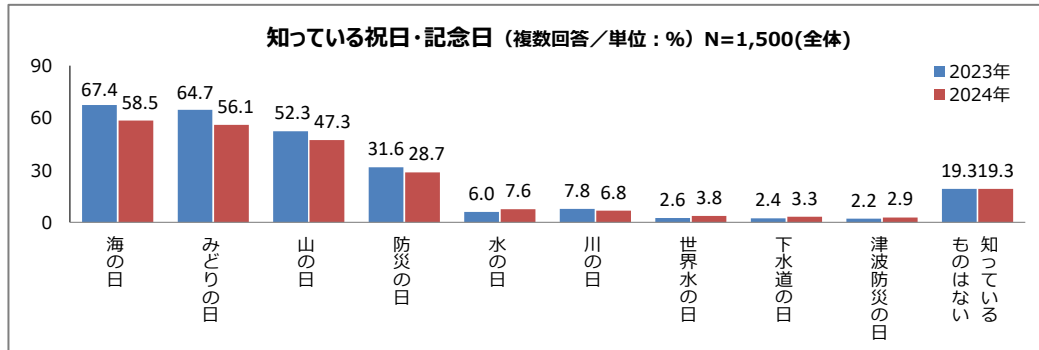


水と生活・文化

Q.知っている祝日・記念日は？（9択＋知っているものはない）

◇「水の日」の認知率が7.6%で過去最高を更新

水や自然にかかわる祝日・記念日の認知については、「水の日（8月1日）」の認知率が1.6ポイント増の7.6%で2022年の7.4%を上回り、過去最高値を更新しました。また、「世界水の日（3月22日）」（3.8%）や「下水道の日（9月10日）」（3.3%）の認知率も上昇しました。



Q.みずみずしいと感じる有名人は？（自由回答）

◇1位は「綾瀬はるか」、「大谷翔平」が男性トップの3位

「今、最もみずみずしいと感じる有名人は誰か」を自由回答で尋ねたところ、「綾瀬はるか」がトップとなり、2位に「浜辺美波」、3位には、昨年のMLBで自身2度目となるシーズンMVPを受賞し、今年からロサンゼルス・ドジャースで活躍中の「大谷翔平」が、男性唯一のトップ10入りを果たしました。「みずみずしい」とは、つやがあって若々しい様を表す言葉であり、回答者の多くは“鮮度”や“旬”、“さわやかさ”などをイメージされているのではないかと考えられます。つまりは、その時々の人気ランキングとも言えそうです。ちなみに、この調査は1996年、2007年、2017年と、過去3回実施しており、それぞれの1位は1996年「西田ひかる」、2007年「長澤まさみ」、2017年「広瀬すず」という結果でした。

今、最もみずみずしいと感じる有名人 トップ10

順位	名 前	割合 (%)
1	綾瀬はるか	2.73
2	浜辺美波	2.40
3	大谷翔平	2.20
4	永野芽郁	2.07
5	広瀬すず	2.00
6	今田美桜	1.87
7	芦田愛菜	1.60
8	新垣結衣	1.13
9	橋本環奈	1.07
10	北川景子	1.00

【ご参考】過去調査時の結果

(2017年調査)			(2007年調査)			(1996年調査)		
順位	名 前	割合 (%)	順位	名 前	割合 (%)	順位	名 前	割合 (%)
1	広瀬すず	7.27	1	長澤まさみ	15.8	1	西田ひかる	8.1
2	有村架純	4.93	2	斎藤佑樹	7.8	2	山口智子	6.8
3	新垣結衣	3.27	3	藤原紀香	7.3	3	イチロー	4.8
4	綾瀬はるか	3.00	4	上戸彩	5.7		安室奈美恵	
5	石原さとみ	2.20	5	石川遼	4.2	5	観月ありさ	4.2
6	土屋太鳳	1.53	6	浅田真央	3.4	6	鶴田真由	2.9
	藤井聡太		7	松嶋菜々子	2.6	7	松嶋菜々子	2.6
8	波瑠	1.47	8	成海璃子	2.3	8	内田有紀	2.4
9	福士蒼汰	1.20		吉永小百合			木村拓哉	
10	北川景子	1.13	9	仲間由紀恵	1.8	10	ともさかりえ	2.0
	菅田将暉			蛭原友里			瀬戸朝香	

沖大幹先生プロフィール

沖 大幹（おき たいかん）
東京大学 大学院工学系研究科 教授
「ミツカン水の文化センター」アドバイザー

1964年東京生まれ。1993年博士（工学、東京大学）、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より同教授。2016年より21年まで国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学（すいもんがく）で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』（岩波新書、2016年）、『水危機 ほんとうの話』（新潮選書、2012年）など。2024年には、水のノーベル賞とも呼ばれる「ストックホルム水大賞」に選ばれ、紫綬褒章を受章。その他生態学琵琶湖賞、日本学士院学術奨励賞、日本人として初の国際水文学賞Doogeメダル受賞（2021年）やヨーロッパ地球科学連合John Daltonメダル（2023年）など表彰多数。



「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

創業の地である愛知県の知多半島は水が得にくい土地柄だったため、文化元年（1804年）の創業時より、良質な醸造酢をつくる為に山から木樋で水を引くなど、水の苦労を重ねてきました。また、廻船で尾張半田から江戸まで食酢を運んで社業の基礎を築くなど、水と深いかわりを持ってまいりました。

このように創業以来、「水」の恩恵を受け、「水」によって育てられてきたミツカングループは、1999年に「水の文化センター」を設立し、「水」をテーマとする社会貢献活動を行っています。

「水にかかわる生活意識調査」は、1995年にセンターの活動開始に先駆けて、「日常生活における水とのかかわり」について調べてみようと考えたのがきっかけで始まりました。さまざまな生活の中での水への意識を、四半世紀にわたって調査、発表し続けており、今年が30回目となります。